

高木 私も同じです。桐蔭学園高時代はとにかく勝ちたい、甲子園に出たいと思って練習を続けてきました。しかし慶應では野球部に入っただけで満足する者、背番号をもらい、ユニフォームを着ただけで満足する者がいる。そのギャップを埋めるのに苦労しましたね。

ほかでは味わえぬ面白さと空気感

仁志氏は4年春に史上初のサヨナラ満塁本塁打、高木氏は3年春の天覧試合で本塁打を放つなど、早慶戦という大一番で印象的な活躍をしてきた。ほかの試合とは異なる感情がわき上がるのがこの伝統の一戦なのだという。この二人が考える、早慶戦の一番の魅力とは――。

◎ お二人にとつての早慶戦は、どのようなものなのでしょうか。

仁志 こればもう、経験した者でないと言えない面白さがあります。これまで野球をやってきて、最も面白い試合が早慶戦なんです。最も緊張感があるのは社会人・日本生命時代の都市対抗予選で、最もやりがいがあるのはプロ野球の日本シリーズ。早慶戦は日程的にもリーグ戦の最終カードですし、そこだけにある、特別感が何物にも替えがたいです。最終週に早稲田と慶應だけが試合をし、その中で応援合戦もある。そして優勝すれば、そのままパレードにも行ける。良い瞬間をすべて味わえる舞台でしたね。

高木 仁志さんがおっしゃるとおりで、実際にあの打席に立ったり、守ってみないと分からない空気感がある



PROFILE

にし・としひさ ●1971年10月4日生まれ。茨城県出身。常総学院高では夏の甲子園に3度出場し、1年時に準優勝。早大では4年時に主将となり、春の早慶戦では史上初のサヨナラ満塁本塁打を放つ。秋にはリーグ優勝を達成。通算打率.325、11本塁打、40打点。日本生命を経て96年ドラフト2位（逆指名）で巨人入団。巧打の二塁手として活躍した。2007年に横浜へ移籍。10年には米独立リーグでプレーし、この年限りで現役を引退した。現在は解説者を務める傍ら、14年4月からは筑波大学院で体育学を学ぶ予定。

「これまで野球をやってきて、最も面白い試合が早慶戦」(仁志)

んです。私は甲子園でも日本シリーズでも満員の球場で戦っています。が、まったく質が違います。それに、早慶戦についてはどこでも語れますよ。それがすごいと思います。

――プロで満員になると、早慶戦で満員になるのでは違いますか。

仁志 全然違いますね。あの一休感と声の聞こえ方。なんと表現したらいいのか難しいのですが、それを味わった後にプロへ行くと、自信というか気持ちの余裕が違います。

高木 勝負を超越した。何か、を感じる事ができます。よく高校野球ではスポーツマンシップと言いますが、20歳を超えた大人が多い中、終

わった後にそれを味わえる戦いなんです。私の場合、プロに入ってから逆プレッシャーでした。「慶應でエンジンジョイ・ベースボールをやっていたんでしょ？」という目で見られる。となると、それ相応のプレーを見せなければいけませんから。

――最後になりますか、お二人は将来的に早慶の監督をやってみたくないですか？

仁志 難しいことを聞きますね（苦笑）。僕は14年4月から筑波大の大学院で体育学を学ぶ予定ですが、自分の感覚を、根柢を持って説明するスキルを身につけたいと考えています。2000安打を打ったり、

仁志 [早大] 敏久

200勝した人がいる中で、そうでもない自分がどういう指導者になるべきか。そのためには中身を突き詰めていくべきだと思います。その中で勝負できる指導者になりたい。でも早稲田の監督……これはばかりは僕の一存では決められません。

高木 仁志さんにはぜひやってもらいたいなあ。現役時代からいろいろなことを考えながら、打ったり守ったりしていた。引き出しをいっぱい持っていると思います。私は引退後、西武の球団職員として働き、現在は系列のプリンスホテルで経営を勉強させてもらっています。プロ野球をビジネスとして確立させないと、子どもたちは夢を持ってないと思うんです。その部分をプラスアルファにしてグラウンドに戻ることができれば、何かが変わるのではないのでしょうか。慶應の監督については仁志さんと同じ考えですが、私自身の考えでは、やれるのならばやってみたくいです。